

第 5 卷

森 書

SEIJU

1986

夏季号



横浜 善光寺刊

拜啓梅雨の候となりまじか愈
市健勝のこころ存じます

成壽弟吾子回封いたしました

海外留学僧派遣事業はお断りと
もろ軌道となり各方面から高く
評価されお喜びます。尤も先實した
運業と期すべく一攸の工費と努力を
を仰せあります。その間の子と産婦か
らお読み取りいただきは幸甚とす
時中柄ゆ自量す下にお過すは
たく又徳田の市支援を切にお喜び申
ます

敬具

昭和二十一年六月五日

日光寺小住 黒田大園
(武志)

各位

忿いかり
怒り

身のいかりを

まもり

身をつつしみ

身になすべからざるを

棄すてて

身になすべきことを

行うべし

第 5 卷

戒 書

SEIJU

1986 夏 季 号



横浜 善光寺刊



円空仏



不動明王像（伊藤三喜庵筆）

花開けば必ず眞実を結ぶ

山主

黒田大周

中村元先生といえは文化勲章受章者としてごなたも御存知かと思ひますが、国内のみならず、仏教哲学の権威として世界中に知られている大学者ですが、過般『中外日報』に、「いまの日本は、世界の荒波の中に置かれており、仏教も世界的な視野をもつて活動するのぢなければ、日本人を指導することはできないし、いわんや外国に向つて働きかけることは不可能だ」と申されて、善光寺海外留学僧派遣育英会に心から賛同して下さいました。この記事を一読した私は、「これ人に会うなり」の感を深くし、中村元先生を育英会の名誉顧問にお迎えすべく決意し、早速参上してお願い申上げたところ、御快諾は勿論のこと大変よろこばれ、激励してくださいました。私は、この日ほど大きな感動にふるえたことはなく、どんなことがあつても絶対にやむじげない」と、誓いを新たにしました次第であります。

一昨年に発足した善光寺海外留学僧派遣育英会は、昨年、黄檗宗の田中智誠君、浄土宗の梅田尚平君をタイ国ワット・パクナムに派遣し、今年は、カルカタ大学博士課程在学中の浄土宗の安井隆同君をインド留学僧に決し、曹洞宗の河内義宣君をアメリカ・ロスアンゼルス禅センターに派遣しました。目下のところ、年々派遣できるのは二、三名に過ぎませんが、しかし、小水の常に流れて則ち能く石を穿つが如く、十年二十年の後には、善光寺学僧の大きな力の輪が必ずや仏教界に新風を吹き込んでくれるであります。いま綻びはじめたこの花は、必ずや眞実を結ぶであります。

留学僧諸君、善光寺海外留学僧派遣育英会の将来に期待し大いに精進していただきたい。また、ひろく海外に学ばんとする方々は、遠慮なく応募してほしいと思います。

華開必結眞実（華開けば必ず眞実を結ぶ）

青葉逢秋即紅（青葉、秋に逢つてすなわち紅なり）

一『永平広録』第七一

参禅会



ボーイスカウトの



博志君得度

賀博志君得度

象龍續々如走盤
博志染衣稱大莞
三様三人即一箭
善光寺裡春可歡

昭和三十一年二月八日

龍光後回



博志君の得度を賀す

象龍ぞうりゆう統と統と、盤ばんに走わするが如ごとし

博志はくし、染衣せんいして大莞だいかんと稱なづす

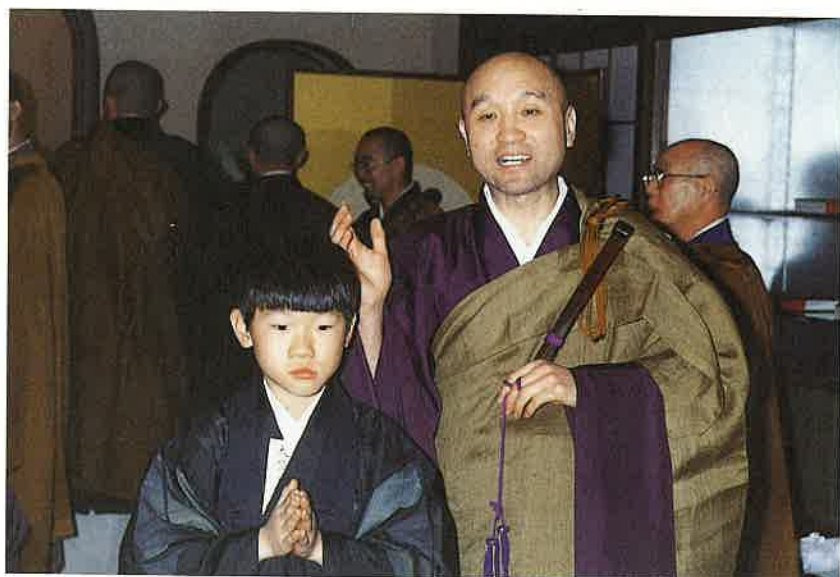
三様さんさや三人さんびん、即すなはち、一箭いつせん

善光寺裡ぜんこうじり、春天はるびとの歡よろこび

解説

禅門ではすぐれた修業者のことを龍象りゆうぞうという。ここでは平仄ひやうそくの關係で象龍ぞうりゆうとしたが意味は同じである。すぐれた子供たちが続々と現われて、あたかも円盤えんぱん上に玉たまをころがすが如くである。博志君は得度とくど（染衣）して、大莞だいかんという僧名となった。武徳・泰志・博志の三人は三様の素質を持つており、一致協力して強力無比の箭や（矢）となる。得度式のおこなわれた二月八日、善光寺には春の日の歡びが溢れている。





総持寺にてお授戒



総持寺



人を育てん

赤間 義徳

永平寺は

単なる大寺院ではない

永平寺は

僧林である

宗祖道元禅師様は

釈尊正伝の仏法を弘めるため

渾身の力をふりしぼって弟子を育てられた

宗祖様の大誓願は

いくつもの時代を通り抜けて

黒田大圓方丈様の心に

まっすぐに とどいた

タイ インド アメリカをはじめ
世界のくにぐにへはばたいていく
海外留学僧たちを

慈愛にみちて眺めながら

方丈様の活眼は

百年先をきびしく見つめている

「一年先を想う者は

花を育てん

十年先を想う者は

木を育てん

百年先を想う者は

人を育てん」

善光寺收藏品



常滑經塚壺 平安時代



藍古九谷 大皿



アヲカミタノ
のサイン
1957



忿 怒 (いかり)

「法句経」

カラー	■ 円空仏・不動明王像	……………	黒田 大圓	2
あいさつ	■ 花開けば必ず真実を結ぶ	……………	黒田 大圓	4
カラー	■ ボーイスカウトの参禅会	……………		6
	■ 博志君得度	……………		8
	■ 総持寺にて御授戒	……………		9
詩	■ 人を育てん	……………	赤間 義徳	12
カラー	■ 善光寺収蔵品	……………		14
法 話	■ 仏祖の心	……………	黒田 大圓	18
特 集	■ 燃え続ける芸術人生—伊藤三喜庵先生を訪ねて	……………		26
	■ この人を語る 伊藤喜三郎先生と私	……………	黒田 大圓	40
エッセイ	■ 禅と衣食住(一)	……………	東 隆真	48
中外日報より	■ 世界的視野が必要	……………	中村 元	53
レポート	■ 原始仏教における無我	……………	安井 隆同	55
	■ 禅の国際化と私の役割	……………	河内 義宣	61
説 話	■ 仏説孟蘭盆経物語	……………	佐藤 俊明	67
	■ 善光寺だよ	……………		76
詩	■ 観世音声を限りに	……………	遠藤 太禅	

編集後記

カット・題字●伊藤三喜庵
 □ 絵・写真●五十嵐千彦

仏祖の心

黒田大圓

人間は誰しも、一生けん命に取り組むべき仕事を選ぶ時には、人それぞれ様々なきつかけがあります。私は一介の僧侶ではありますが、この道を指し示してくれたのは師匠でもあります私の父でした。すでに七年前に亡くなっておりますが、その父の幼い頃の話は、少なからず私に波紋を呼び起こし、次第に大きな輪を広げてきたように思います。

父は三歳の時に父親……私の祖父になりますが……を亡くしております。むかし、雪の降る淋しいお葬式の日のお話をしてくれた事がありました。

秋田の冬は雪が深いんですが、その雪道を、わらじ

を履いて笠をかぶり、母に手を引かれて行った凍えそうな野辺の送りの情景を、父は忘れられなかったんです。幼い胸に刻みつけられた無常観というものが、後に父が仏門に入る事を決定づけたと思えてならないのです。そして、少なからず私も、それを受け継いだと感じて居ります。

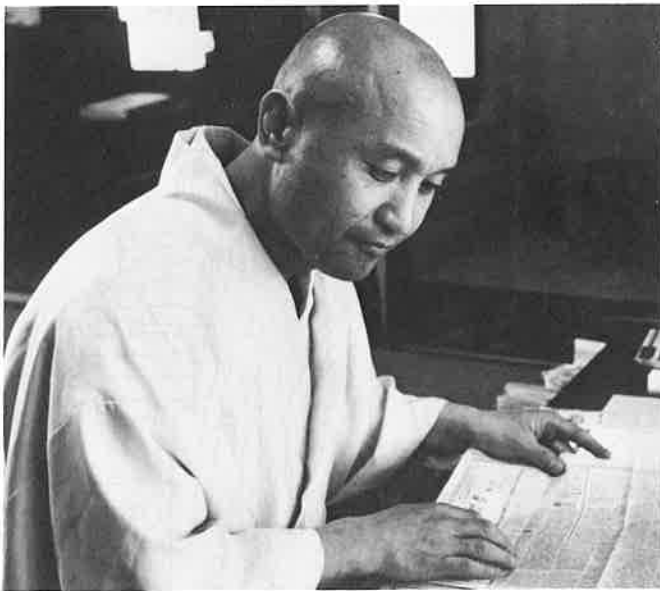
縁あつて僧侶となり、こうして皆様にお話をする機会を与えられましたが、私も迷いの多い求道者であります。ただ、仏祖のこころと言葉を、一生けん命皆さんと一緒に考えてみようと思えます。

お釈迦さまは、今から約二千五百年前にインドにお

生まれになりました。大変裕福な王様の世継ぎとしてお生まれになって、何ひとつ不自由はなかったんですが、長ずるに従い人生を深く静かに考えるお方でした。父親の王様は、それをひどく心配されて、お釈迦さまの気持をまぎらわそうと、いろいろな手段を試みました。またインドは暑い国ですが、夏と冬と雨季と三つの時節があるんです。王様は、お釈迦さまの為に三時殿を作ったといわれます。暑い時節には涼しい御殿に住ませ、寒い季節にはあたたかい御殿に、そして雨季には湿気のない御殿に住ませ、気持をなるべく開放的にするよう努力されたのであります。しかし、その効果はありませんでした。

ある時狩りに出て、しわくちやの老人をみつめました。お釈迦さまは、はじめて老人を見たのです。

お釈迦さまは、老人のしわくちやの顔をごらんになってびっくりなされた。そこで、「あれは何者だ」とたずねられた。家来は「あれは老人といって、年を取るとみんなああなるんです」と答えました。しかし、



お釈迦さまはそれを信じる事ができなかつたんです。次の日にまた同じ道を通って狩りに行きますと、老人は、息も絶え絶えに倒れておりました。「あれは何じや」とたずねられた。「あれは病人といつて、人間はいずれ病気になるます」……三日目には、すでに死んでおりました。「どうしたのだ?」「あれは『死』といつて、人間最後はみんなのちが尽きてしまうのです」と家来は申し上げました。

そこでお釈迦さまは生・老・病・死という苦がある事に気がつかれました。どうすればいいのかとご自身を問い詰められたんです。そして全てのものをお捨てになった。妻や子供を捨てて出家し、どうしたら年をとらないか、どうしたら病気にならないか、どうしたら、死なないか……。一生けん命考えられて、ある時はバラモンの仙人に教えを乞うたり、あらゆる苦行を重ねて模索を続けられたんです。しかし、お釈迦さまは自らの体を苦しめる事では遂に悟る事はできなかつたのです。



最後にどうなさったかと申しますと、静かに心を落ち着けて禪定ぜんじやう三昧さんまいに入られて、この世の中は常に移り変わっているという事に気がつかれたのです。

生まれた子は三年たてば三歳になり、二十歳になれば大人として認められ、やがてお嫁さんをもらう。子供ができる。自分は年老いて死んでいく。常に世の中は移り変わる……。それを止める事はできないんだという事に気がついたんです。

諸行は無常であるという事を悟って、ならば人間がやらなければならぬ事は何かという事をお考えになりました。

生まれてくる。年を取る。年取る間に病気になる。やがては死ぬだろう。絶対にここから逃げる事はできません。この人と別れたくないと思っても別れなければならぬ。こんな顔見るのもいやだと思っても一緒にいなくちゃならない。これが何としても欲しいって言っても手に入らない。こんなものはもういらぬといふてそうはいかぬのです。人間には四苦八苦

といふて、四つの苦しみと八つの悩みがあるといいますが、これが娑婆しやばなんです。

お釈迦さまは、四十九年間……約半世紀にわたって悩み苦しみのある人々に説法なさいました。その説法がお経きやうであります。

タイやビルマ、セイロンの方の南方の仏教と、日本の仏教とは、伝わる間に大きく分かれたんですが、日本の仏教を大きな乗物と書いて大乘仏教と申します。

南方仏教は小乗仏教、今は上座部仏教と言って二百一十七の戒律を堅く守る修行が中心となっています。

私ども曹洞宗には十六カ条の戒律があつて、上座部仏教とは大変な違いだと思われるかもしれませんが、中身はそう変わりません。私は南方で修行してきましたが、二百二十七の戒律を守るんですから、これはどうしても、お坊さん自らが悟りをひらくという事が目的になります。そこが小さい乗物、小乗といわれるゆえんでして、日本の仏教は、お坊さんだけが悟るのではなく、みんなが一つの舟に乗るように救われたいと

願う大きな乗物……だから大乘仏教というんです。

日本に最初に入ってきたのが、天台、あるいは真言
といて、いわゆる密教でございます。簡単にいうと
お釈迦さまの教えを行持する事に加えて、加持祈禱を
中心とした修行を行っておりました。

それが鎌倉時代になりまして、人間はただお願ひす
るだけではダメだ。自分がいかに生きべきかをつきと
めようという事で禅宗が台頭し、今日まで来たわけで
す。

道元禅師という方がおられますが、この方は三歳に
して父上を失くして八歳にして母上を失くされました。
皇族の一門で、大変な名家でありました。しかし、母
上が、亡くなる時に遺言をなされた。「私は余命いく
ばくもない。私はただひとつ願ひがあります。あなた
は公卿の家柄に生まれたけれど、世に出て人の為にな
りなさい。」こう言い遺されたんですね。わずか八歳の
子供に、「世の為になる事をしてほしい。」「それには
宗宗教家以外ない。」と言って亡くなったというんです。

そこで道元さまは出家の決意をなさり、十三歳の時

に比叡山に登って修行なさるんですが、やがて、どう
しても解けない大問題にぶつかるのです。お経には、

「顯密の二教共に談ず。本来本法性、天然自性身」と。

若し此の如くならば、則ち三世の諸仏、甚に依つてか
更に発心して菩提を求むるや。お経に、人間は本来仏
だと書いてあります。本来仏ならばなぜ修行が必要な
のか？これが道元禅師十四歳の時の疑問だったので
す。この疑問を当時の高僧、名僧に質問したのですが
納得のいく答を出してくれる人はありませんでした。
そこで二十四歳の時、中国に渡ってご修行する事にな
ったのです。

諸処方々の寺に登ってはみたものの、これぞという
素晴らしい師匠様に会うことができず、一時はあきら
めて日本に帰ろうかとも思われるのですが、そんな時
ある一人の坊さんから、「こんどの天童山の住持とな
られた如浄禅師は、お釈迦さまから五十代目の法を嗣
がれたまことに傑出したお方だ」という事を聞いて、



天童山に登りはじめて如浄禅師に会われたのです。会ったその瞬間、道元禅師は、「これ人に会うなり」このお方こそこれまでさがし求めてきた正師、正しいお師匠様だと直感して、如浄禅師のもとで修行に励み、

ついに悟りを開かれるのであります。

道元禅師が坐禅堂で坐禅しておりますと、となりの坊さんが居眠りをしました。すると、如浄禅師がやって来て、はいていた履物をぬいでその坊さんを叩き、

「坐禅は身心脱落でなくてはならぬ」と申されました。この時道元禅師、豁然として悟られて、身も心も一切のとらわれから離脱する事ができました。

その後、道元禅師は二年間宋にとどまり、天壺山で修行を重ね、諸山を巡錫をして宝慶三年（一二二七）の秋、如浄禅師の嗣書を授けられて帰国するのです。

帰つてきて、あなたは中国で何を待て来たか？と問われた時に、当下に眼横鼻直なることを認得して人に瞞かれず。便乃ち空手にして郷に還る。所以に一毫の仏法無し」と申されました。空手にして郷に還る、「空手還郷」何も持っていない。空手、からっぽで、手ぶらだと答えたんです。何を悟ってきた。「眼横鼻直」なることを知ると申され、人間のありのままの姿、目は横にあり鼻はたてについているという事に気がついた。それが曹洞宗というものの根本の教えといわれております。悟りというと、大変な事のように思えるかもしれませんが、そう遠い所にあるものじゃないんです。毎日の生活の中にあるのです。「仏道をならう」というのは自

己をならうなり。自己をならうというは、自己をわするなり。自己をわするというのは、方法に証せらるるなり。」と申されております。本来の自己の面目をつきとめ、無我の行を實踐するのが仏道であります。

良寛和尚は「災難に会う時は、災難に会うのがよろし。死ぬる時は死ぬるがよろし。これ災難をのがるる妙法にて候」とおっしゃっておられます。ただそれになりきって生きる。一瞬一瞬を精一杯に受け止めて決して逆らわない。そうすれば自ずと道が開けてくるんです。

「ただわが身をも、心をも放ち忘れて仏の家に投げ入れて、仏の方より行われてこれに従いもて行くとき、力をも入れず、心をも費やさずして生死を離れ仏となる」と道元禅師は言われております。

いまを精一杯生きる事……。その為には、心に深く仏祖の行履を行じてゆく事があります。

本日は、本当にありがとうございました。

（横浜自強術の講演より）



佛縁ゆえか

燃え続ける藝術人生

—伊藤三喜庵先生を訪ねて—

伊藤三喜庵
(喜三郎)

聞き手・佐藤俊明
黒田大圓

方丈〓今日は建築家の伊藤喜三郎先生としてではなく、画家の伊藤三喜庵先生として佐藤御老師と共に画と先生の絡み合いについてお話を伺いたいと思います。

先生は建築家としては、設計事務所を主宰され、既に内外に数多くの作品を残されています。特に、医療福祉関係については医科大学等は十六もの実績を残されると同時に建築作品では、建築学会賞をはじめ多くの受賞経歴をお持ちでいらっしゃいます。また現在、建築界各種法人では会長、副会長、理事等の役員をなされ、社会に奉仕されていることも存じています。

善光寺の設計も先生にお願い致しましたが、建築のことはそれくらいにして先ず寺には先生の絵がたくさんございます。私がモデルになった大作の絵もありますので、先生と絵の関係について今日は紹介したいと思うわけです。先生は絵の方では、日本の墨絵界で代表的な社団法人日本南画院や自由画壇などで副理事長をなさっておられますね。

伊藤〓ええ。本当に私のための企画とは恐縮の至りで



す。それと私の絵があんなにたくさん集まっているところは善光寺のみです。とにかく小さい時から絵は好きで、七十才を越える今日に至って益々好きになるようです。これはかなり方丈さんの責任でもあるんですけど。(笑) 本日は、御期待にそえるようなお話ができませんかどうか、一体どんな事からお話申し上げたらいいでしようか？

佐藤 善光寺は先生の美術館ですね。さて、まず先生はお小さい頃からどんなわけで、絵が特に好きになられたんですか？

伊藤 そうですね。育った環境とでも、或いは血統とか因果とも申すのでしょうか。

まず、私の先祖から申し上げます。伊藤家は芸術に關係の深い藤原氏の出のようです。祖母は名古屋の豪商の娘で、伊藤次郎左衛門氏、つまり松坂屋の初代と縁続きで、当時江戸の華やかかなりし柳橋で料亭をやっておりますそうです。

祖父の方は、当時槍の名手の侍で戌辰の役では切込

み隊長をやったり、石川県知事や憲兵隊の初代の隊長になったりした人物です。祖父と祖母、その剛軟混合の両親の間に生まれた私の父は、職業は剛の方で建築の裝飾金物の製作をやっておりましたが一方趣味の方は、祖母系で粹好みであった由です。父はそれが自慢とされた「宵越しの金は持たない」という気風の江戸っ子育ちで、家庭も全くそんな雰囲気でした。

私共の幼児期からずっと、兄と私を成すがままに放っておいてくれましたほとんど干渉しませんでした。

大正十年の頃の東京は江戸の延長でした。そんな中で、朝から晩まで近所の子供と遊んで過ごしたもので、樋口一葉女史の「たけくらべ」の世界です。

たまたま家の隣に、五、六才の千代ちゃんという女の子の親友がおりました。私が七才位です。千代ちゃんには、とにかく兔が好きで、年中兔の絵を描いてくれとせがんだものがございます。家の前は今日の昭和通りですがその頃はもちろん、交通もあまりなくアスファルトの道の上に、当時一銭位の蠟石を買ってきて、



The statue of Buddha
fasting. Lahore Museum
By Sankiani



*The story of Grahams
9th Century*

兎が飛んでいる絵、太鼓を叩いている絵等、毎日毎日兎の絵を描かされました。それが私にとっては、絵の最初の出会いと言えましょう。

また両親は、美術が好きで上野の展覧会にはよく連れて行ってくれました。彫刻室の女の人の裸には幼少の私が一番恥ずかしがって眼を背けるのを両親は笑って見ておりました。やはり、ませていたのでしょうか？

(笑)

そんな訳で、兎から小学校となり、いろいろな絵を描いていくうちに、何か学校の代表になりましたりいろいろな事がありました。他の事はだめだけれど、私が絵を描くと皆がほめてくれるので一層好きになっただんじやないかと思えます。

佐藤〓小学校から中学校にかけては何か面白い事がございましたか。

伊藤〓中学校は神田の明治中学校でしたが、素晴らしい個性をのびしてくる校風でした。その頃の日本の社会は自由主義思想の爛熟時代でもあり、また社会主

義芸術運動も盛んでした。絵だ、文学だ、スポーツだ、それに片思ひも加わって、全ては少年期の美しい熱っぽいロマンの日々でした。

父の方は、建築の裝飾金物という仕事の関係からそのデザインには年中苦勞しておりましたので、私を画家かデザイナーになるならそれはそれでよいというような事を多分考えていたのでしょう。その頃は、全く勉強をしないで中学でスポーツでへとへとになって帰えいてはからは、また油絵でいよいよへとへとになり寝に就くというものでした。

中学四、五年になると、兄の方は兄の方で大学の方はいい加減で、「新築地」という左翼劇団によく出演しており、有名なレマルクの「西部戦線異状なし」では大活躍しておりました。弟の私は、学校をさぼって舞台装置やら、音響の手伝いやらに夢中になっていましたが、父はそれもほっておいてくれました。兎に角、変わった今から思えば中ぶらりんな家庭でした。小使ひ銭はいつも足りなくて困っていました。

*親類に新潮社の社長が居り、世界文学全集が大当たりをした頃なので、勉強はそつちのけで世界文学書を読み、文学の之も無料なので読みあさりました。それで学校の成績はしんがりをつとめました。(笑)

上野の美術館では入場券が五十銭でしたけれども、女の監視人達から、子供が年中来るけれどお小遣いが大変だろうという事で末で切符をくれまして、いつも無料で入れました。時には、その切符を入口で売ってラーメン代にしたこともありました。その切符の御礼に彼女達の着物の帯に油絵で何かの模様を描いてあげるのです。その頃、世界的な画家の藤田嗣治さんが「ポラー本」と「パリーの横顔」という本を出版しました。私はその本を見て、大変感動したものです。その中で特に画を描く私の行くべき目標を決定づけたエッセイがありました。それは、画家は物を写真のように美しくうまく描いても意味がない。一番大切な事は、先ず自分の個性を開発して表現は前人未踏な分野を開拓して自分にしか出来ない美を創造することであり、

それがこれからの世界的な絵画運動の焦点になる。というような事です。確かに、エコールドパリの巨匠達は皆、その戦士であった訳です。私も、自分にしか出来ない絵画をどう創造するかという事に苦心に苦心を重ね、遂には絵具やカンバスまで学校をさばっても特別のものを自製せずにはいられなくなりました。ヨーロッパでは常識を自分の内から除き本来の自分の個性を知るために多くの芸術家が麻薬を使うとか酒びたりになるとかということが流行しておりました。それも本当の自からの個性的な作品を創造する手段であった訳です。

そして十六才の時、自製の絵具やキャンバスに金属のへらのみで表現した自己流の作品が前衛絵画運動の中心であった独立美術協会に初入選致し朝日新聞に出ました。この会は、野獣派と言われた新しい絵画運動で燃えている団体でございまして帝展(今日の日展)と違い、本当の芸術運動の固まりで、私も入選して以来いよいよ燃えたわけです。そして、中学を卒業した

らすぐにもパリに出掛けて行って、藤田嗣治さんのコースを自分も歩きたいという思いも固まりました。それから、いろいろな公募展に入選し始めました。そして、少年のロマン「愛と美に燃える放浪の画家」になりたいと自分を小説の主人公と混合して考えておりました。歌劇の「ラー・ボエーム」の感動も、私の少年期を揺さぶりました。

十六、十七才の子供の私が中学を休んで、二十三才の美しいモデルを家に呼んで裸にして、二百号位の大作にかかっておりまして、両親は私に協力的でございました。部屋は石炭ストーブでございましたけれども、父がよく石炭をくべに来てくれたり、母が紅茶を持ってきてくれたり私を一流の画家の扱いにしてくれましたが、内心はやはり裸の女性と部屋に閉じこもる私が心配だったのかもわかりません。それとも、私がモデルに接した時はセックスの感情などは湧かず、戦いを挑む闘士になることを理解したのでしょうか。今だに分かりません。



そしていよいよ中学を卒業する間際になって、パリに行くか、それとも日本でどうするかという事が家族の間で問題になりました。その時父は、やはり絵描き

さんは絵ではなかなか食べられない。だから、家も建築関係の仕事をしているのだから、とにかく大学の建築学科に入って建築をやりながら絵を描いたらどうか

というような結論になりました。そういえば、英語もフランス語も全くしゃべれないこともありました。中学卒業時は以上のような訳で学校の勉強はしていなかったので四十三人中四十番、しかも操行は丙でした。

しかし運が強いというのでしょいか全く奇蹟的にも日大理工学部に入学できました。どうも私の人生はスリルとサスペンスの連続です。今日の受験勉強連続の中学や高校や予備校の若い人達には全く想像も出来ないであろう夢のような青春でした。

大学の建築科に入ってみますと、大変な勉強が必要であり、今までのよきうではとても進学出来ないという事にギョッと気が付いたのです。たまたま、東大の総長の息子さんで内田祥文さんという方と机を並べていた時、彼は私にこう言うのです。「建築は、社会との係わりが大きい、大変スケールの大きな男の仕事である。絵の世界は金持ちのサロンを飾るだけのものではないだろうか」というような意味のことでした。これはショックでしたね。私も成る程と思い、とにかく

建築科の学生になった以上、今まで絵に打ち込んだ熱情を出来るかどうかとにかく転換しようと思いましたがそれはとても苦しいけれど、恋人と別れる思いで建築の学問の方に向かおうと努めました。中学時代の勉強のおさらいから始めて大学の勉強に専念する事を悲痛にも決定した訳です。私の大学時代の生活は、絵を描けない反発から、かえって烈しいヒンズー教の教徒のような気違いじみた勉強が開始されました。ほとんど寝ても覚めても勉強という事で、汚い話ですが、トイレットに入るにも、学期試験が終わったその日も勉強するというような時代が続きます。その結果中学でボクシングまでやっていた自信のある私の強靱な体は急速にやせ胃下垂や胃弱になやむようになりました。

しかしその大学でも、建築の設計図が、今まで盛んにやってきた絵の勉強のお陰で良いものが出来たと思いません。決まった水彩画法のみでなく、油絵、グアッシュ、パステルと種々の技術で表現してみました。学生時代の私の作品は殆ど色刷りとなり、一般学生の参考

に配られました。

故小野薫教授は、そんな学生の私を大変可愛がって下さって、パリから帰国したばかりの新進の国際的建築家、前川国男先生を紹介して下さいました。学業の傍、その事務所でお手伝いさせて頂くやら、東大の総長になられた内田祥三先生の建築の作品のペースを描くやらこれらのことは将来の私の建築家としての人生に大きく関わって来るんですが、考えてみますと、両先生は日本の最高権威を持った方々で、学生時代に超一流の建築家のペースを描くという事はなかなか無いのではないかと思います。幼い時の千代ちゃんに描いた兎が大変に成長した訳で建築家としての今日迄関わって来ました。

佐藤〓本当に人生というものは当人にとっては全く予測できないものでしょうね。

先生、それで大学時代はほとんど絵をお描きにならなくて、その後御就職とか、兵役とかがございましたかと思いますが、そのあたりをお聞かせ願えませんか？

伊藤〓お陰様で勉強の方に夢中になったので、大学は理工部を一番で卒業することができました。従って就職口はたくさんあり、私がどれを選ぶかというような状況でございました。私は、東大の営繕科の研究室のような所に臨時的に入って、もう少し建築の社会を勉強したいと思ひまして、臨時的な嘱託として入りました。これが他の所に正式に務めていると人生を決定するような事にもなるわけです。私にとりましては、将来を未知数にしておいた事が非常に良かったと思っております。その営繕科の研究室は八人位で、東大教授の玉子の集まりの部屋でしたので大変勉強になり、またそこに居られた先輩に対して今日迄も続く友情を得たのもここからでした。今日ではその人達は皆夫々の分野で建築界のリーダーになっております。

東の間の一年間で、その後軍隊に入る事になりましたが、兵隊に入った当時は第二次大戦の二年前でしたから、日本軍部の方針もあってか想像以上に厳しい毎日でございました。社会は自由主義から軍国主義に変

わりつつあった訳です。初年兵の時に、あまりの苦しさ
に仲間から自殺者が二人も出た位です。私はと申し
ますと、絵画への恋情がまたつのり夢を見るようになって
いました。不思議に今でも鮮明に覚えている夢が
あります。その夢の一つは、すごい霧の中でカンバス
を立てて絵を描いているのですが、あまりに霧がひど
くて全く景色が見えないのに何か描こうとあせってい
るのです。霧の中から前述の内田先生が現れて私に一
寸声をかけられ、再び霧の中に消えて行きました。ま
たある夢では、室内のテーブルの上にいる緑色の三十
cm位の芋虫を見つめているうちに、それがいつの間
にか女体となり、緑色の肌と黄色の斑点が現れ、くるく
る廻りながら狂ったように舞うのです。私が飛びつい
て捕らえた瞬間、彼女に刺され眼をさしました時、
どす黒い苦しい現実が目の前にありました。

戦争が始まりましたが、外地に行くこともなく除隊
となり、日立製作所に防空の技師として勤め、終戦で
この仕事も終はり成建設の設計部に入る事になりまし



説法釈迦

た。

大成では、かの有名なライト氏の設計、帝国ホテルが火災で焼けたので、その復旧もやれました。焼土と化した東京はバラック建築のブームでしたが、そのバラック建築の中で銀座4丁目角のライオンビヤホールの大壁画とか、その他いくつかの壁画を梯子に乗って描くことも出来ました。

そして、大成建設を役三年八カ月で退職させて頂き、自分で設計事務所を開きました。苦しいけれど自由な世界が開けました。絵もだいぶ描けるようになりまして。三十七才になっておりましたが、その時は勿論社員は私一人で女房も収入の面では大いに心配でしたでしょうが、何とか楽しくやっているうちに一応の形が整って参りまして、社会保険中央病院とか、虎の門病院とか非常に大きな仕事をするチャンスも巡って参りました。

話が前後になりましたが家内のことを申し上げますと、三十才丁度、日立製作所に勤めておりました折り

に見初めたのが今の家内です。無料のモデルが出来たのです。長男は戦争の最中、アメリカのB29の爆撃中に生まれたのですが、当日の朝の家内の肖像画は今も残っております。

佐藤先生はその頃、絵という油絵とか水彩とかいろいろあると思いますけれど、まだ墨絵には入っておられなかったのですか？

伊藤はいい。殆ど油絵です。やがて事務所の方も順調に発展し、社員も三十名位になりました。中学時代から好きでやっておりましたボクシングが縁で、先輩の世界で日本学生ボクシング連盟の書記という形で、西ベルリンでの世界会議出席のため、まだ一般には許されなかった海外旅行のチャンスが巡って参りました。パリやローマ等では同行の連中の許しを得て二カ月半、自由に一人で飛び廻れることになりました。十六才の時の夢が四十才で実現された訳です。モンマルトルの丘に登った時は私の胸の中には少年時代からあこがれ敬愛する近代画壇の巨匠達が次々に去来し、感動で涙

が出て仕方ありませんでした。

ところが御承知の通り、パリやローマでは英語は殆ど通じません。私の英語でも何とかなると思っておりますが、一人旅で神経を使つたせいでしようか、胃と痔がおかしくなりました。ホテルで三日も四日もベッドに伏せていて、全く心細い限りでもう帰れないかなどと何度も考えました。美術館を廻りましても油絵のコテコテとねちっこいものばかり、食物も日本料理店はなく、さうりとしたお茶漬けなど夢で胃が痛いのに油っぽいものでヘトヘトになっておりました。

ノートルダム寺院のわきのセーヌ河畔の古本屋街を暮方一人で歩いていた時です。その古本屋の中に日本の墨絵の版画が目にとまりました。何と清新な清々しさだったでしょうか。その瞬間、眼が覚めました。私は日本人だ。食物も芸術も日本人は日本のものしかだめなんだ。少年期に読んだ藤田嗣治さんの言葉も思い出しました。私は日本人で、芸術も日本人でやらなければならぬんだ。その瞬間から、私は墨絵に入る

うと百八十度転換した訳です。

帰国後、中国の伝統をひもときながら根本的に墨絵の勉強を始めました。

伝統的な事に傾倒して追求していくうちに偉大な波にぶちあたりました。その偉大な波というのは、仏教文化です。そこで墨絵と仏教美術が私のテーマとなつて行きます。それで、仏教と墨絵の世界を源流にして自分の芸術を組み立てて行くべきだという事をはつきりと悟つたわけでございます。

その頃、私共の設計事務所帝国ホテルの高橋貞太郎先生のお世話でインドに救ライセンターの設計をすることになりました。その何回目かの訪印の際、日本の代表的な宗教者の方々の団体の仏蹟参拝のお仲間に入れて頂く機会を得ました。その宗教者の中で兄弟のように気の合った方がおり、その方がここに居られる方丈様でございます。

方丈様にはインドの仏蹟を歩きながらいろいろ生きた現地での教えを賜りました。私は運の良い男です。

方丈様も私もどちらかというところあげつろげて、何で
もしゃべりたい事はしゃべり合い、全く意気投合した
わけでございます。靈鷲山の頂上で方丈様と黄金色に
輝く夕陽を眺めながら、ここで釈迦様が説法された
などの御説明で感動してその光景をスケッチブックに
焼き付けたわけでございます。私のそれからの宗教心
は方丈様の直伝に拠るものでございます。以上が私の
壮年期以降の墨絵と仏画とを結びつけていったきっか
けです。本当に方丈さんとの出会いはこれこそ仏縁と
言うものでしょうね。

佐藤 先生は幼年期から今日に至るまでのお話を聞いて
てきました。が、仏縁という事をしみじみ感じさせられま
す。

伊藤 有難いお言葉です。とにかく今だに絵に夢中にな
っておりまして、毎日寝る前に少なくとも二、三時
間アトリエに籠もらないと寝つきが悪いというような
癖がついてしまいました。その原因の一つには方丈様
の存在があると思います。方丈様は私が何を描いても

日本一だ日本一だと大変お誉め下さるので、私も何か
本当にそのような気持ちになってきて、また一生懸命
になるという次第です。(笑)

しかし、芸術という世界は大変難しゅうございます。
また、芸術の情報も非常に多く、価値観もいろいろ変
わり、作者はそれぞれに自分の道を探しあぐねて居り
ます。本当に何が良く何が悪いのかという事は、これ
からはいよいよわからなくなってくると思います。私
はこれで食べて行かなくても良いので、そういう事に
あまり煩わされなくて方丈様の激励の下に、今後も仏
教心を基盤にして勉強していくつもりでございます。

今日は全く私のプライベートな絵の世界のことでい
ろいろと御時間を頂きまして本当に有難うございまし
た。

佐藤・方丈 大変有意義なお話をお聞かせいただきま
して本当にありがとうございます。

於、伊藤三喜庵先生宅

この人を語る

伊藤喜三郎先生と私

黒田大圓

先生とは、昭和四十年の暮れからご縁をいただいて、すでに二十年を迎えました。

最初の出会いは、中外日報の第二回インド仏蹟の旅行で一緒させていただき、飛行機の中で親しくお話をさせていただいたのが、そもそものはじまりでありました。

伊藤先生はその時、インドのニューデリーにハンセン病のセンターを設計なされ、その竣工式に出席なさるところでありました。私たちは仏蹟の巡拝で、先生もそのメンバーとして各地を廻り、デリーの竣工式に御出席なさるために、同じ団体に参加なさっておられたわけです。

給油の為に香港で一時間ばかり時間がありません。

私共特別僧堂の面々は海外旅行がはじめてなものですから、何かめずらしい物がないかと空港内で立ち回ら品定めをしておりました。気がつくとうしろに立派な紳士の方がおられて、「みなさん、今はお買いにならない方がいいです。」とおっしゃるんです。「帰りに又香港に寄りますから、お買物はその時になさったらどうですか？」と助言してくださいましたのが伊藤先生でした。

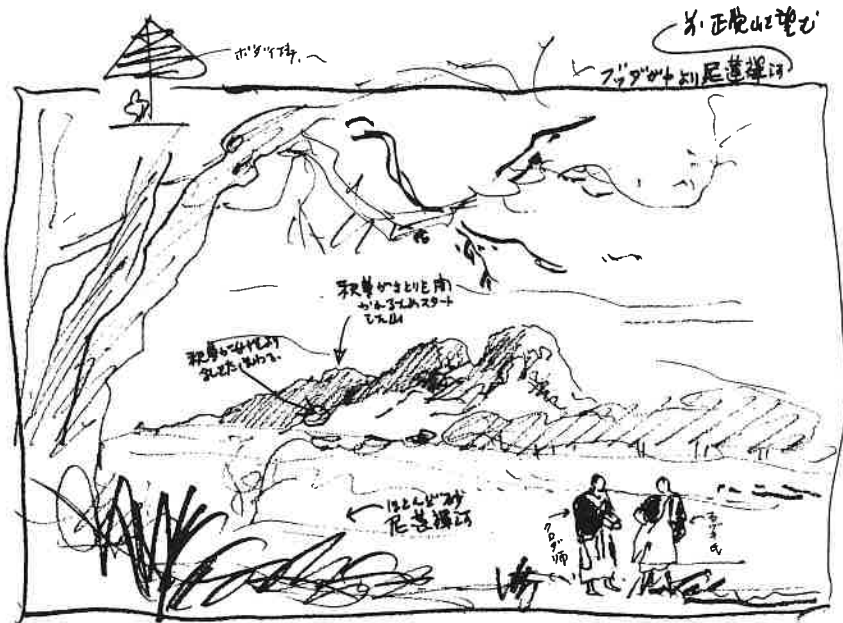
その後、飛行機の中で「先生、お仕事は何をしておいでのですか」とおたずねいたしましたら、名刺を出されて「私は建築の設計をしております、東北工

業大学の教授をしております」と話してくださいました。

いろいろなお話を伺っているうちに、先生が十二回もインドを訪れていらつしやることを知り、何度もインドを旅していらつしやる先生と一緒に心強いと思います。のちのち金魚のフンドと言われましたが、どこへ行くにもお供をさせていただきました。その時に伊藤先生がニューデリーにハンセン病のセンターを建築なさった事を知ったわけです。

空港よりカルカッタ市内のホテルに向かう頃はもう真夜中でしたが、目に入るものすべてがアラビアンナイトのような世界で、大変感動いたしました。

次の日の朝、我々は先生と一緒に市内のヒンズー教の寺院であるカーリーテンプルを見学しました。人間と牛が同居したカルカッタの町は、寺の中にも乞食・金持ち・病人・死を待つ人々が入り乱れ、あふれておりました。いけにえにしたひつじの首を、そのままカーリー神に捧げる光景を目のあたりにして、儀式とは



いえ、これが人間のなせるわざであろうかと、私は度胆を抜かれました。

そのあとインド各地をまわりましたが、お釈迦さまが、苦行ののち前正覚山から下りていらして、尼蓮禪河のほとりてスジャータから乳がゆの施しを受けたという場所で「このあたりでお釈迦さまはスジャータの乳がゆをいただいたんじゃないでしょうか」とご説明いたしますと、先生は大変感動なされ、すかさず紙を出してスケッチなされたんです。それが素晴らしいスケッチだったものですから、思わず「先生は一体何をなさる方ですか？」とお聞きいたしますと、「絵も描いています」とおっしゃるんです。先生が建築家であると同時に画家で日本南画院の理事でもあるという事を、その時知ったわけでございます。

ヒンドウ教徒のメッカ、ベナレスの聖なるガンジス河の沐浴場では、凝縮されたインドの宗教の形を見る事ができました。

誕生の祝福も、死者の供養も同じ水に委ね、そのか



たわらには瞑想にふける修行者の姿があり、全てはガ
ンジスから発しているというヒンドウの原点を見たよ
うな気がしました。

四大聖地の参拝の途中、デカン高原にさしかかりま
すと、深い森の中には野性のサルが群れをなしてとび
廻っておりました。夕方の、地平線に沈む太陽は、何
か火の玉のように感じられ、直径、四、五十メートル
はあるかのように思われました。インドでしか見る事
のできない美しさに、先生も私も涙を流して大感激を
した事は、忘れる事ができません。

その折に描かれた二百号の「釈尊説法の図」は、現
在善光寺の不動殿にあります。

その後、インドの旅の途中で臨済宗大徳寺派高桐院
の御前さまが高血圧で体調をくずされ、我々は一体ど
うしようかと迷っておりましたら、伊藤先生が、ご自
分だけが残って高桐院さんを看病なさり、日本に無事
帰れるように一切の手続きをしてくださいました。何
とご立派なお方だろうと、非常に感動いたしました。



先生に尊敬の念をいだけ大きなきっかけとなりました。

アジャンタ・エローラと仏教美術の宝庫を巡りましたが、アジャンタの石窟寺院では、法隆寺金堂の観音菩薩の源流とみられ、世界美術史上不朽の名作とされる、有名な蓮華手菩薩の前で、高価なコダックフィルムを惜し気もなく入れかえては、一心不乱に写真を撮り続ける先生のお姿は、美を求める菩薩に思えて、驚嘆のほかありませんでした。

シャー・ジャハーンが愛する妃タージの為に、三十年かけてつくったといわれる大理石の巨大な廟（墓）、タージ・マハールを見学したあと、興奮さめやらぬといった面持ちで、「私も家内の為なら、何十年かかっても彼女の望む事かなえてあげたい」と言いながら、遠い日本に思いを馳せておられる先生の姿に、心打たれました。現在、先生が最も好きなテーマとされている「捨身飼虎」の絵は、「この身を捨てても大切な人の為には何かをしてあげたい」という先生の偉大な口



マンチシズムが表出したものであると思います。

*人間は、生かされて生きているという事を、その時先生から教わりました。私もその心境を持ち続けたいと思っております。

ハンセン病のセンターの竣工式で、先生は何か、人生でこれ以上の満足はないといった喜びのお顔をなさっておられました。その日の夕方、骨董屋にお供をして参りますと、先生は大変古美術に造詣が深く、古いタンカ（マンダラ）をお求めになりましたので、私も先生のお徳にあやかっただけの一枚を求めました。おそらく、ダライラマが、インドに亡命の折り、チベツトから持ってきたタンカだろうと思われるのですが、当時で八十ドルでした。欲しいと思いましたが、はその時私はあまりお金を持っておりませんのであきらめかけておりましたら、先生が立て替えてあげようとおっしゃって、トイレの中で腹巻きからお金を出して、私に貸してくださいました。

それが、古美術に目を開ききっかけとなるはじめて

の買物でした。お釈迦さまの供養の図です。それを伊藤先生のお力添えて手に入れる事が出来たわけです。

その夜、ホテルに帰って、先生と二人でインドの旅で求めたタンカ・ヘレニズムの美しさを秘めたガンダラの彫刻、純インド的なマトウラの仏像などを、部屋中に並べてささやかな古美術展を開き、スコッチで乾杯してインドとの別れを惜しみました。

インドの仏蹟を終えてバンコックに参りました。私は先生に将来の夢を話しました。「私の願いは宗祖を通して釈尊に還るという事で、まずタイ国で修行したい。その後仏舍利を勧請して日本に持ち帰り、津々浦々まで仏舍利塔を建てて供養したい。日本中にパゴダを建てよう！その設計は先生にお願いしたい！」と――それがその時の私の大誓願だったんです。

伊藤先生はその事を変えようこんでくださいました。タイで一通りの観光を終えた夜に私を招待してください、お坊さんとして修行を積み、頑張ってくださいと申されました。お酒をごちそうになりながら先生と別れを

惜しみました。

タイで修行中、中外日報の本間社長さん（当時は部長さん）が修行中の私を訪ねてこられてプー殿下を紹介してほしいとおっしゃるんです。私は全日本仏教会の関係で妃殿下と親しくさせていただけではありませんから、お会いできるよう段取りをしてお案内申し上げたのですが、その折本間社長さんから、「パクナムを通して、あなたがおあずかりしておられる仏舍利を、真如苑に勧請させていただけないだろうか」という話を伺いました。

立正佼正会はインドの大菩提会から仏舍利をいただき、妙智会はビルマから勧請しているのですが真如苑にはまだございませんでした。そんないきさつから、仏舍利を持って帰る事になりましたが、間もなく真如苑で本殿を建てる事になり、その設計を先生がなさったのです。何という奇縁だろうと、本当にうれしく思いました。

タイ仏教の伝統的大組織、マハーニカイ派のワット・



パトナムで、二百二十七の戒を守る三衣一鉢の僧院生活を無事にすませて帰国いたしました。その後、アメリカの禅センターに開教師として出向きました。役をすませて帰国しましたので、挨拶に伺いますと、先生はしみじみと、「いくつになつた？」とたずねられるのです。「三十三です」と申し上げますと、「そろそろ、お嫁さんが必要だね」と、私の事を大変心配してくださいました。そこで先生は、銀座の資生堂のパラー等でいろいろな方を紹介してくださいましたが、なんと一時間に三回もお見合いしたというエピソードがあります。それ程、先生は私を案じてくださっておいででした。もちろん、結婚式には仲人をお願いいたしまして、今日まで至っているわけでございます。

釈迦殿の設計から、お不動様のお札の絵、「成寿」の表紙やカット、新年会の福引の色紙に至るまで、善光寺の為に絵を描いてくださり、檀家の方々も先生には非常に感謝しております。奥様には善光寺婦人会の会長という立場で、寺をお護りくださっておられます。

何もわからないところから今日まで二十年間、ひとつひとつ指導を賜りながら歩かせていただいたご恩は、言葉にはいい尽くせない思いがございます。

全く無名の私に、旅行で一緒だったというささやかなご縁だけで、心から慈父のようなあたたかさを惜し気もなく注いでくださいました先生のおかげで、どうにかここまで来る事ができました。いまだ何ひとつご恩返しをする事もできませんが、只々、精一杯の心で感謝するのみでございます。

もしも許されるのであれば、アジア十二カ国に散在する仏蹟を訪ね、釈尊の徳を慕いつつ聖地を直かに踏みしめて、先生に「釈迦一代記」を描いていただき後世に残す事ができれば、それ以上の報恩はないのではないかと思います。

世界平和と人類の幸せの為に

明日の光明の為に

そして、釈尊の教えを世界中に広める為に――

和服とお袈裟・作務衣

東 隆 真

日本人の日常生活のなかには、仏教、禪とのかかわりをたくさん見い出すことができます。それは、すでによく知られているのもありますし、案外見すごしている場合もあります。

日常生活といえば、衣、食、住の三方面が、その基本となるでしょう。

まず、私たちの和服をとりあげてみたいとおもいます。

昨今は、冠婚葬祭などのあらたまった時や特別の行事をのぞいて、和服を着ることは少くなりました。と

くに男性の場合は、この傾向が強い。洋服を着ているほうが、ずっと多いわけです。けれども、和服のすばらしさは、よその国の民族衣装にくらべて、けっしてひけをとるものではありません。

さて、その和服ですが、和服は、要するに、長方形や正方形の布切れを縫いあわせてつくります。

洋服の場合は、円形や梯形の布切れを人体にあわせて縫いあわせてゆきますから、よほどちがいます。

和服は、たんすにしまいこむときは、たたんでしまえば、小さな長方形にまとまってしまいます。

洋服は和服のようにたたみこむことはしません。ハ

ンガーにつるすわけです。

和服は、方形の布切れを縫いあわせてできていること、そして、小さく方形にたたむことができること。

この点は、仏教僧侶のお袈裟に共通するところがあります。

お袈裟も、方形の布切れを縫いあわせてつくり、方形に小さくたたみこんで収納することができます。

お袈裟は、もともと、仏教僧侶の衣服であり、シンボルです。お袈裟をまとわない仏教徒はありえないのです。

とくに、天台宗、真言宗、曹洞宗、浄土宗などでは、お袈裟のつくり方、身にまとう方法、収納法などについて、いちいち、こまかい規定があります。

和服が、いつごろから、なぜ、どのようにして、現在のかたちになったのか、門外漢の私はまったく知りません。

しかし、きっと、仏教のお袈裟と、どこかがかかわりがあったにちがいないと思われてなりません。

しかし、お袈裟と和服との関係については、まだ誰も指摘していないようです。

くわしく調べてゆけば、いちいちおもしろいことがわかってくるのではないでしょうか。

大学の卒業論文のテーマになります。

日本の服装史に新しい一ページを加えることができます。かも知れません。

つぎに、作務衣について。

このごろ、作務衣が流行しています。

作務衣は、文字どおり、禪僧が、作務つまり労働するときに着用する衣服です。

和服を改良したのと言ってよいでしょうが、上下に分かれているものもあり、いないものもあります。

上下に分かれている作務衣は、上部は袖が小さく袖口はしばってあり、下部はもんぺのようなズボン様のかたちになっています。

なかなか軽便な衣服ですが、もともと労働着ですか

ら、正装ではありません。ですから、あらたまった場合に作務衣を着てひとに対することは礼を欠くことになりません。

やむをえないときは、作務衣を着ている非礼を相手におくことわりしなければなりません。

しかし、そんなこととはおかまいなしに、この作務衣が一般に流行して、ニューファッションとしてとりあげられ、もてはやされるようになりました。

なかには、京都のさる有名な禪宗の本山の特別許可のもとにつくった本格的な作務衣なるものまで登場して、新聞広告をにぎわしています。

管長さんのお墨付きを麗々しく掲げて売り出すといった思わせぶりの商法です。

法衣専門店で売っている作務衣と、ちかごろの企業が新聞、雑誌の広告で売り出している作務衣とは、厳密に言えば、ややちがいがあります。

それにしても、権威ある作務衣として販売するために管長や本山までまきぞえにした広告には、ばかばか

しさを通りこして、おもわず吹き出してしまっています。

なにも知らない一般の人を愚弄しているといえ、すこし言いすぎでしょうか。

だいたい、作務衣に、そう特別の変ったかたちや用途があるわけではありません。それに、法衣専門店の作務衣の方が、どちらかといえば廉価のようです。

私の知人の東大教授は、近ごろはやりの作務衣を着て、下駄をはいて、街のなかを闊歩しています。

洋服を着た私は、そのすがたを、ほほえましくながめながら、肩をならべて歩くのです。

私も、書齋で仕事をしているときや、庭に出て草花をいじっているときは、法衣専門店で購入した作務衣を愛用しています。

(駒沢女子短期大学学監、教授)



中外日報より

第2回 印度と米国へ

……………曹洞宗光寺海外留学僧派遣育英会

曹洞宗の善光寺住職黒田武志氏〓横浜市港南区日野町一六〇四〓が一昨年に設立した「善光寺海外留学僧派遣育英会」は、二回目となる今年も留学僧二人の採用を決定し、四月から仏教発祥の聖地インドと、文明の先進大国であるアメリカのロサンゼルス禅センターへ、それぞれ派遣する。広く世界に活眼を開く人材の育成が同育英会を設立した黒田氏の願いである。世界の大勢に即応して教化の実を挙げるには、国際感覚を身につけた僧侶の輩出を待つかないとするれば、自ら宗派を越えて道心ある青年僧を求め、東西の十字街頭に立つて釈尊の教法宣布を實踐する人材を育てようとの決意である。

留学僧は往復旅費及び滞在に要する必要経費を育英会から支給される。一人は富山県氷見市触坂の安井隆同氏(二三五) 〓浄土宗〓で、もう一人は静岡県榛原郡

榛原静波の曹洞宗釣学院副住職河内義宣氏(四一)。

安井氏は大阪府枚方市の成雲寺住職を昭和五十八年二月に辞任し、文字通り一衣一鉢、寢袋を携えてインドへ旅立った。釈尊が生涯をかけて説法行脚した聖地を三年がかりで歩くことを発願し、現在、カルカッタ大学の大学院博士課程に在学中である。

河内氏は座禅を「安樂の法門」として受けとるには道なお遠しの憾みありとして、また今日の日本仏教の姿を根本的に考え直すために、初心に還って修行したいと留学を志したという。

ここに第二回留学僧二人の留学志願レポート一篇ずつを抜粋して紹介し、併せて、この育英事業の意義を高く評価する東方学院院长中村元博士(東京大学名誉教授)に期待の言葉を寄せてもらった。

世界的視野が必要

中 村 元

中村元先生のプロフィール

大正元年生まれ

東大名誉教授

東方学院院長

仏教哲学・インド思想比較思想論の研究で有名

主な著書

「新仏教辞典」

「インド思想の諸問題」

「仏陀・大乘仏教集」

「ブツダの言葉―スッタニパータ」

黒田武志氏が独自に、独力で海外留学僧を外国へ派遣されるということは、非常な快挙だと思います。日本仏教の起源を尋ねれば、いくつもの外国を経てはいつてきたわけですが、島国独自の事情があり、ことに徳川時代に三百年も鎖国を続けたことから海外との接触は弱かったと思います。

それは日本独自の文化を育てるという意味では、いい点もありましたけれども、どうかすると井の中の蛙大海を知らずということになる恐れがありました。現在でもその傾向が見られるようです。

いま日本の国は、世界の荒波の中に置かれています。仏教とても世界的な視野をもって活動するのだければ、日本人を指導することは出来ませんし、いわんや、

外国に向かつて働きかけるといふことは不可能であります。

日本の都会でいただいている食糧も、大部分は外国から来ていると聞いていますが、それぐらい諸外国と日本とは密接な関係があります。したがって将来の日本を築く方は、どうしても外国を見て、その上で反省して、従来の日本仏教の持っていた特長を、どのように発展させたらいいかということを考えてみる必要があると思います。

書物を読むだけでも相当目的は達するわけですから、やはり自分で、じかに外国の空氣にぶつかってみることが大切だと思えます。単なる観光とても、むしろ意義のあることには違いありません。けれども、単なる観光ではなくて、諸外国の精神的基盤にまで踏み込んで、身を似て体得するといふことが是非とも必要でありましょう。

本年度はアメリカとインドへ留学僧を送られるそうですが、どちらも大きな意味のあることだと思えます。

インドは申すまでもなく、仏教発祥の地であり、いったんはイスラム教の軍隊に滅ぼされましたけれども、現在は着々と復興しつつありますし、ことに仏教精神を重んじるということは、インドでは朝野を通じて認められていることです。仏教復興の姿を自分で見るといふことは、大きな意義があると思います。

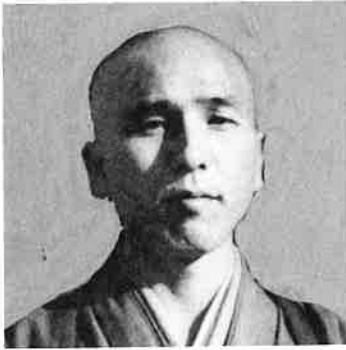
他方、近代文明の行きつく最先端にアメリカの文明があると思います。アメリカはヨーロッパより以上に近代的であり、新しいものを実現しました。その新しい精神的雰囲気の中で、仏教がどのような役割を果たすことになるのか、これをじかに体得することは、将来、日本を指導していかれるためにも有意義なことですし、また広く諸外国と交流をはかる上でも重要なことだと思えます。

諸方面の若い方々が、希望に燃えて、大いに志願され、そして審査員の方々が最も適当と思われる人々を選抜されて、この偉大なる目的を達成されることを切に願ひいたします。

(談)

原始佛教における

無我



安井 隆同

カルカッタ大学パーリ学部
原始仏教哲学専攻博士課程

原始佛教においては、自己をこの上なく愛し^{いと}み尊ぶことを教え説きつつ、無我を説いている。自己を愛し^{いと}み尊ぶことは自我であり、無我とはあい反し矛盾していることを説いているようにも考えられる。

印度のある神が『子供ほど愛しいものはない。』と言ったのに対して、釈尊は『自己ほど愛しいものはない。』と答えた。これは古代ウパニシャッドの哲人ヤージニャヴァルキヤが『ああ、真^{ほんま}に夫を愛するが故に夫が愛しいのではない。自己を愛するが故に夫が愛しいのではないのである。妻を愛するが故に妻が愛しいのではない。自己を愛するが故に妻が愛しいのである。子供を愛するが故に子供が愛しいのではない。自己を愛するが故に子供が愛しいのである。』と説いたのと同じである。ヤージニャヴァルキヤが説いた自己が、いかなる意味を有するかということについては、後世ヴェーダーンタ哲学者の間で盛んに論議されている。原始佛教においては、まず人間は利己的なものであるという、どうにもならない現実の認識からはじまる。

ある時、コーサラ国のパセーナデイ王は、マリツカー妃とともに佳麗なる王城の高殿に上って、外の様子を眺めていた。その時王は妃に尋ねた。『マリツカーよ、あなたにとって自分よりもっと愛しいものがあるかありますか。』妃は『大王さま、私にとっては自分よりもっと愛しいものは何もありません。』と、王は虚しく感じ黙った。最愛の人の間でさえもこうなのである。人間のありのままの正直な心が素直に出ている。マリツカー妃は、さらに問い返し『大王さま、あなたにとって自分よりもっと愛しいものがありますか。』と、大王は『マリツカーよ、私にとっても自分よりもっと愛しいものは何もありません。』と空しく答えた。そしてパセーナデイ王は、ひとり高殿から下り、祇園精舎の釈尊を尋ね、事の次第をすべて語った。釈尊はその時、黙って聞き、聞き終えると『人の思いは、何処にも赴くことができる。されど何処に赴こうとも自己ほど愛しいものを見出すことをできない。そのように他の人にとっても、自己ほど愛しいもの

のではない。自己の愛しさを智るものは、他の人を害してはならない。』と詩句を唱えただけだった。

釈尊が、ルンビニーの花園で母マーヤ夫人の右脇から誕生して、すぐに立ち上がり東西南北に七歩づつ歩み、天と地を指差し『この世の中で自分ただひとりが尊いのだ(天上天下唯我独尊)。』と宣言したと伝えられている。この言葉で釈尊は何を表現しようとしたかについては、いろいろと論じられている。これは釈尊自身が、そののち佛陀となる偉大なる身だからこの私ただひとりが最も尊いのだと言ったのでは決してない。釈尊は、いかなる生きものといえども、世のすべての機縁が寄りて集まり熟して、この宇宙のすべてを生かしている大生命なるものから、受けがたい命、宇宙の大生命とひとつづきに生きて流れている命、別のようにも観えながら大生命と一体となった命、自分勝手に生まれ生きているのではない、選ばれて、許されて、生かされて生きている、尊い自己なのであると、深く自覚したのである。だからこそ、この世の中で何より

も誰よりも、自己が最も尊いのだと言ったのである。

釈尊は、深く自己の生命、宇宙の生命の尊厳さ不可思議さを自覚し、自己の誕生にあたり、一切衆生、生きとし生けるものに、釈尊自身と同じように、ひとりひとりが何よりも最も尊い存在であるのだと力強く宣言した言葉と受けとれる。

生きとし生ける一切衆生のひとりひとりが、世のすべての機縁の寄りて集まる、宇宙の大生命の最も尊い中心点であるとも言え、この宇宙なるものは、大生命の中心点ばかりが無数に拡がり、辺境のない球のようなものとも言える。

自己の愛しさ、尊さを徹底的に追求し、真ほんとうに自己の愛しさ尊さを深く自覚し、それを超えた所に、最も愛しく尊い自己と同じように、自己をこの上なく愛しく尊く思っているひとが四方、八方、回りじゅうにいることに気付かせて頂くのである。

マザーテレサ女史が、カルカツタのある集会で「近くに、何日も食事できないで飢えている家族がいると

聞いて、僅かばかりの米を携えて親子を訪問した。母親に米を手渡すと微笑みを浮べ受け取り、早速すぐ裏の家に持って行き、半分づつ分けて来た。マザーテレサは思わず『あなたの家族みんなの一食分にも足りるかどうかの米なのに、どうして半分も裏の家にあげたの。』と尋ねると、その母親は『裏の家族も私達と同じように何日も食べてないのです。』と答えた。」という話をされたことがあった。

ある時私は、歩いての仏蹟巡拝の行脚中に、身分も生活も最下層の貧しき農家に立ち寄った。夕方に、家の主人が素焼きの器に香のようなものを燻くすべ、家の周りを浄め、家と天に向って直向ひたせき祈りをささげ、その後、家の庭に野の鳥たちにと僅かばかりの穀物を播いていた。自分達の食物も覚束おぼつか無いのに。貧しさの底に、香り豊かな一輪の白蓮華を観、無我の実践を見る。釈尊は、自己と同じように、一切衆生を愛しみ尊ぶことを説き実践した。そして我々凡夫に、これが無理なれば、せめても一切衆生を害するようなことだけは

慎めとぎりぎりの所で、血の滲^{にじ}む思いで力説しているのだ。自己に執し自己を徹底的に愛しみ尊ぶことの究極的自覚が、生きとし生ける一切衆生を自己と同じく、

この上なく愛しみ尊ぶことに百八十度転換され、自我が自己も他も分け隔てのない、自他一如の無我の世界へと転じられていくのである。合掌

仏の国印度の大地を歩む

仏陀は私自身の中に生く 菩提への道遠し、されど……

世界のあらゆる文明、文化、政治、宗教、人間のやうなことを総ては、時の流れとともに、どこかにかたより、こたわり、とらわれて在るべからざる方向に流れ、そして混迷の一途を辿る。その時に、我々は、そのものの自体の根源に立ち戻ることが最上の道である。現代の世の中を眺めてみると、世界は益々小さくな

り、それを取り囲む諸問題は益々大きくなる一方である。縁あり、若くして昭和五十一年より大阪の浄土宗成雲寺住職をさせて頂き、檀信徒に支えられ私なりに一生懸命、法を学び、法を説かせて戴いた。しかし、一生懸命になればなるほど、総て矛盾だらけ、仏教も、世の中も、私自身さえも解らなくなる一方であった。

そんな頃、五十五年二月に、浄土宗大本山百万遍知恩寺法主林靈法猊下と印度仏跡巡拝のご縁を頂戴した。林猊下の力強い現地説法を拝聴し、釈尊入涅槃のクシナガラの開夜に立ち合掌、額づかせて頂いたとき、ああ…、この大地には何かある…、何時の日にか、この宏大な大地を、釈尊とともに語り合せて戴きながら、悠久の流れの中を、ただ歩ませて頂く。釈尊と私の間には、どんな高僧、学者、地位、学問、財宝も挿まないで、直々に釈尊と対座させて頂くのだ、という夢が脳裏を掠めた。

その夢が現実になるまでには、三年の歳月が流れ、総ての縁が熟し、人に委ねられるもの総てを委ね、一衣一鉢、寝袋を携え五十八年一月に印度に旅立たせて頂いた。

すべてをば、ゆだねしのちの、命をも、仏にあずかるく歩まん

印度の大自然、人々、食べもの総ては想像以上に厳しく、一度は、何もかも投げ出して帰国しようと思っ

たこともある。投げ出すものも無い私には、己自身に打ち勝つ以外に道は無かった。

「寒さと暑さと、飢えと渴えと、風と太陽の熱と蛇と、これらすべてのものにうち勝って、犀の角のように、ただ独り歩め。」
(スッパニ

ータ)

そんな時、優しく微笑み語りかけて下さる釈尊…。

仏陀釈尊は、仏聖地にいらつしやるのでも、寺の本堂やそれ以外のところにもいらつしやるのでも、私と対座していらつしやるのでもなかつた。この私自身の内に、私とともに生きていて下さった。

いにしへの仏陀釈尊我れに生き我れを生かすところまでも

仏陀釈尊が生涯をかけ説法行脚された聖地を、ただ黙して村から村へ行脚。釈尊の声なき声が聞こえ、釈尊の見えざる尊姿が観え、文字無き経が…。今は、ただ何も語れず、書けず…。

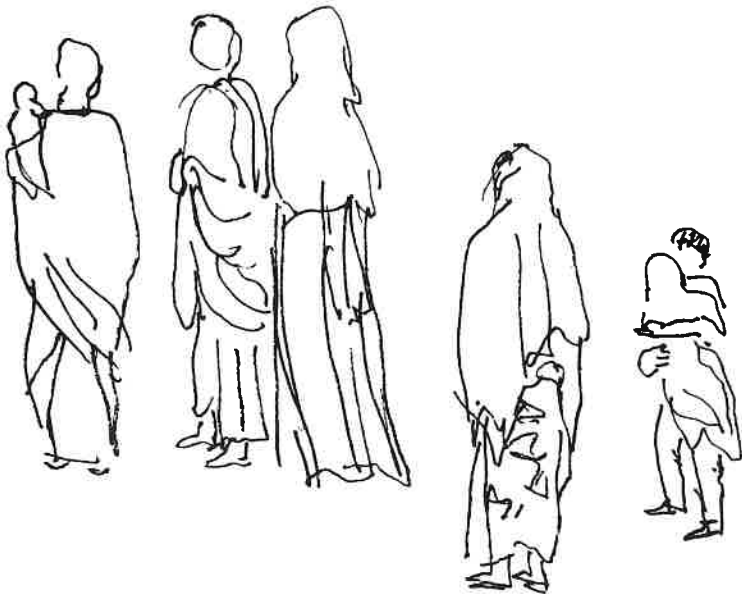
ゆっくり行脚をつづけるには、印度の諸状況から大

学に籍を置くことが最も適していた。幸運にもカルカッタ大学にご縁を戴き大学院博士課程で原始仏哲学の研究をさせて頂くことになり、それと同時に、大学の近くのカルカッタ・インド大菩提会（マハボディンサイトイ）でスリランカ僧と僧院生活をさせて頂くことになった。ただただ大感謝で天を仰ぎ地に伏す。

ある人いわく、「そんなもん印度なんかただ歩いて何になる、何がある」と。私は、何にも無くてもいい、何にもならなくてもいい。何にも無いところこそ、何にもならないところこそ、真に何か、最も尊いものがあるような気がする。求めればもとめるほど、菩提への道は遠くなる、されどこの道を行く。

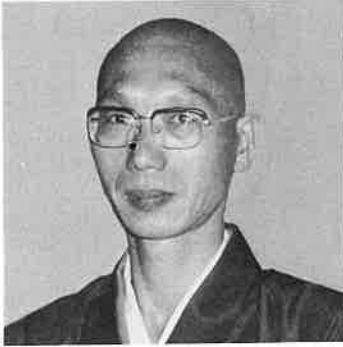
永遠なるものを求め、永遠に迷える我は凡夫、迷いが迷いで悟りとなり、凡夫が凡夫で仏となる。仏の法（おしえ）に涙し、とぼとぼと、とぼとぼと、ただとぼとぼと、とぼとぼと…釈尊（あなた）にただ一歩近づかんがために、かぎりなく歩む。

合掌



禪の国際化と

私の役割



河内 義宣

駒沢大学仏教学部 卒
釣学院 副住職 補佐

今回、アメリカ禅センターへの留学を志したのは、そんなにだいそれた望みがあつてのことではない。ただ初心に還つて修行しなおさねば、という考えからである。

ほそぼそながら、師匠の留守をあづかり、毎週一度の坐禅会を続けてきているが、メンバーの中には、数は少ないながらも、真に坐禅を楽しみ、文字どおり道楽、道を解して自ら楽しむまでになっている人たちがいる。

『法華経』「五百弟子受記品」に

其の国の衆生は、常に二食を以てせん。一つには法喜食、一つには禅悦食なり。

とあり、また道元禅師は『弁道話』や『普勸坐禅儀』において、坐禅は「是れ安楽の法門なり」と示されているが、省みて自分は、坐禅を自己棄籠中の物にしていかどうか、思えば慚愧にたえない次第である。坐禅は仏行だからやらねばならぬ、といった「つとめ」

の気持はあっても、これを禅悦食とするところまでは至っていない。したがってまた安楽の法門として受取るには道なお遠しの憾みがある。これでは、人に坐禅を行ぜしめ、人を仏道に誘引して仏地見を開かせることは不可能事に属する。初心に還らねばと思うこと切である。

いま一つ、私を留学に馳りたてるものは、日本仏教、寺の今日的な姿の不甲斐なさである。二十年弱、寺をあづかり、多くの人びとと接して思うことは、今日の寺は、亡き人を介在してはじめて成り立っていること、極言すれば亡き人の介在なくしては存立し得ない状態にあることである。私はここに大きな矛盾と疑問を感じ、自分の無力さを思い知らされるのである。

今日、家族制度が急速に崩壊しつつあり、核家族化が進み、合掌することも知らない人たちが急増している実状を見る時、祖先をまつる心がそう簡単に消滅しないとは思ふものの、日本仏教の基盤が大きく崩れつつあることを感ぜざるを得ない。いまにして、生きて

いる人を相手にした仏教を打ち建てねばならぬと痛感するものである。

以上の二つの課題解決のため、私は是非ともアメリカ禅センターに留学したいと思ひ立つに至ったものである。

二

「釈尊に還れ」「祖師に還れ」とはよくいわれることである。まことにそのとおりだが、今日の状況のもとで、いかにしたらそれが可能であろう。

汝等比丘、我が滅後に於て、当に波羅提木叉を、尊重し、珍敬すべし。闇に明に遇い、貧人の宝を得るが如し。当に知るべし、此は即ち是れ汝等が大師なり。若し我れ世に住するとも、此に異なること無けん……とあり、戒律は実に仏の生命だと示しておられるのである。

現に南法上座部仏教においては、比丘は、二二七の戒律をまもっている。しかし、これは、自らのさとりを究極のねがいとす。社会生活とは明確に一線を画

した出家教団の比丘ならでは受持し得ないことであり、自他共にさとの道に進もうとする大乘仏教では、あまりにも煩瑣に過ぎることである。そこで道元禪師は受戒するが如きは、三世の諸仏の所証なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壞の仏果を証するなり（『修証義』第三章）

と釈尊の精神の健承しながらも、三涉、三聚淨戒、十重禁戒の十六条にすべての戒律を集約されたのである。

そして、さらに一方において、

諸仏如来ともに妙法を単傳して阿耨菩提を証するに、最上無為の妙術あり、これただ、仏にさづけて、よこしまなることなきは、すなはち自受用三昧に遊化するに、端坐參禪を正門とせり、と、また、大師釈尊、まさしく得道の妙術を正伝し、また三世の如来、ともに坐禪により得道せり……（『正法眼藏』「弁道話」）

と述べ、坐禪と戒法、禪戒一如の道理を示されている。

る。そして、

もし人一時なりというとも、三業に仏印を標し、三昧に端座するとき、遍法界みな仏印となり、尽虚空ことごとくさとりとなる（同前）

とあり私どもが、たとい一会一時たりとも三昧の境地に正身端座すれば、この身このまがさとりであり、仏であると証明しておられる。ここに、釋尊に還り、祖師に還る道があるのであり、私どもは參禪弁道に精進しなくてはならぬと痛感するものである。

三

“仏教東漸”といわれる。仏教がインドから中国に伝えられて、禪が興るまでは約六百年を要した。日本に仏教が伝来し、貴族仏教、学問仏教の域を脱皮して、真の庶民の宗教となった鎌倉時代まで、これまた約六百年の歳月が流れている。

しかるにいま、仏教が欧米に伝えられて百年少々しか経過していない。この短い歳月の間に、また思想、信条の異なる欧米人が果して仏教を禪を理解し得るで

あろうかと懸念する向きもある。しかし、情報化社会の今日の百年は、過去の六百年に比すべきであらうし、また、¹⁾外国人が果して禅を理解するであらうか²⁾などということは、思ひ上がりも甚だしいことである。

諸仏は一大事因縁の為に世に出現す。直に衆生をして仏の知見に開示悟入せしめんがためなり。而して寂靜無偏の妙術あり、是れを坐禅といふ（『坐禅用心記』）

太陽は、資本主義社会にあつても、共産主義社会にあつても、ひとしく太陽であるように、衆生をして仏智見に開示悟入せしめんとする仏の慈悲にはかわりなく、寂靜無偏の妙術、坐禅の効用また洋の東西を問うものではない。そして初発心時便成正覚である。

東京多摩の神暝窟では、ドイツ人のラサル神父が、自らも長く参禅し、信者にも坐禅を勧めているという。坐禅は宗教やイデオロギーを相対するものではない。だから、欧米においても、宗教やイデオロギーのいかにかわりなく、多くの人びとが坐禅に親しみ、中

には剃髪出家して、本格的に参禅并道している人の数も相当数にのぼり、また、すでに師家分上の境地に達した人もあるという。アメリカカソスの禅センターを訪ねた人の話によると、多くの人びとが嬉々として参禅に精進していること、資格や履歴のための修行ではなく、まさに、純粹に不染汚の行を修し、立派な僧伽を形成しているとのことを聞き、私は中国における禅の勃興期を思うのである。

爛熟した日本の寺の禅ではなく、新鮮で、しかも燃えるような道念をもつて禅悦食としての坐禅に親しむ異国の人びと、しかも家族制度や檀家制度のしがらみを持たないこれらの人びとと共に学び、共に坐り、坐禅をして真に寂靜無漏の妙術として駆使する弄精魂の智をみがきたいものである。

本山の御授戒に

参加

＝四月十二日＝ 於 総持寺





勅使門

本山では毎年四月十日から十六日までの七日間、報
恩大授戒会えがおこなわれます。

授戒会えというのは、仏の戒法を仏に代わってお授け
する宗門最高の儀式であり、戒弟かいてい（仏の戒法を受ける

人）は寺に寝泊りして、心に仏を念じ、口に「南無三
世諸仏」を唱え、耳に声明しょうめいや説戒を聞き、眼は法要に
注ぎ、体で礼拝をおこない、五日目の晩懺悔道場に入
つて身も心も清浄になり、六日目の晩には須弥壇上に
登り、続いて戒師様から仏弟子となったあかしとして
のお血脈を頂戴し、七日間に満散帰宅となるのです。

ところが、お互い忙しくなった今日、七日間も留守
にすることはむずかしくなりました。それで、因縁脈
授与といひまして、お授戒に因縁を結んだ人には、た
とい一日戒弟たりとも、仏の戒法をお授けしてお血脈
を授与する便法べんぽうがとられております。そこで善光寺で
は、一日戒弟を募りましたところ七十三名の希望者が
ありましたので、黒田方丈先導のもとに本山に上山し、
終日法に随って行動し、全員めでたくお血脈を頂戴し
て帰途につきました。一カ寺で七十名を超す戒弟をお
連れしたのは善光寺がはじめてで本山当局にたいへん
感謝され、また戒弟の皆さんが有難い法悦にひたられ
たことはよろこばしい限りでした。

仏説孟蘭盆経物語



佐藤俊明

皆さん、お盆の由来をご存知ですか。

日本で孟蘭盆会（お盆の法会）が最初におこなわれたのは斉明天皇の三年（六五七）ということです。それ以来、千三百有余年、春秋の彼岸会とともに、祖先及び先亡の精霊をまつる大事な年中行事となりました。

お盆の起源はもともとと古く、いまを去る二千五百年、お釈迦さまがこの世におられたころの物語に由

来するもので、それをくわしく伝えてるのが『仏説孟蘭盆經』であります。

聞如是

一時仏在舍衛國祇樹給孤獨園 大目乾連始得六通

お釈迦さまには十人のすぐれたお弟子がいました。

その中でも、目連尊者というお方は神通第一といわれ、不思議な力をもっていました。

十大弟子

舍利弗 智慧第一

(智慧にすぐれ、いろんな問題を適切に処理する)

大目連 神通第一

(変幻自在の力をもっている)

摩訶迦葉 頭陀第一

(よく身心をととのえ、どんな苦行にもたえる)

須菩提 解空第一

(よく空の意義を体得している)

富樓那 說法第一

(説法がたくみで、ひろく人々を教化する)

大迦旋延 論議第一

(仏の教えを深く理解し、邪見を正す)

阿那律 天眼第一

(十方世界を手にとるように見通す)

優波離 持律第一

(よく戒律をまもる)

羅睺羅 密行第一

(行持綿密である)

阿難陀 多聞第一

(常時仏に随い、多聞で忘れない)

欲度父母報乳哺之恩 即以道眼觀視世間

見其亡母生餓鬼中 不見飲食皮骨連立

目連悲哀……

ある日のこと、目連尊者は、今は亡き父母のことを思い出し、安否を確かめたく、ご自慢の神通力でなが



めてみますと、悲しいかな、お母さんは餓鬼の世界におちて、何も食べることができずに苦しんでいたのです。

さて、その餓鬼の世界の苦しみというのは、「倒懸」といって、足をしばって倒たかにつるすことで、苦しみの大きいことにたとえたものです。

人はただ独りだけでは生きられないもので、大勢の人々のあたたかい愛情と協力にささえられて生きていくものです。それなのに、自らの欲望のために、人を殺して、獄舎につながれて苦しむのは、まさに「倒懸」でありましょうし、また、独りよがりて他人の迷惑を考えないのは、「心の倒懸」であり、それがために引きおこされる悲惨な出来事は私どもの周囲によく見られることです。

即鉢盛飯往餉其母 母得鉢飯

便以左手障飯右手搏飯食未入口化成火炭 遂不得食

目連尊者は、早速、餓鬼の世界に出かけ、お母さん

に食物を差上げたのです。ところが、恐ろしや、左手で食器を持ち、右手で食物をつまんで口に入れようとすると、食べものはたちまち焰となって、食べることができないのです。

石油危機を千載一遇のチャンスとして大もうけをしようとしたり、世論の総反撃にまでも便乗したり、虚飾の陰に満足することを知らず買いあさり、買いだめに狂奔する、さらには、収入が物価高に追いつけないなど、争いが争いを呼んで、この頃の世相はまさしく餓鬼道ではありませんか。

目連大叫悲号啼泣 馳還白仏 具陳如此

孝心あつい目連尊者は、その苦しみを見るにしのびず、お釈迦さまのもとに参り、教えを乞いました。

「餓鬼の世界に落ちて、苦しんでいる母を、なんとか助ける方法はないものでしょうか」

「お前の母は、生前の罪があまりにも深いので、いまそのむくいを受けているのだ。その母を救うには、お

前ひとりの力ではどうすることもできないだろう」

「なんとか、救う方法はないものでしょうか」



「さいわい、七月十五日が間近い。この僧自恣じしの日に、心から清らかな僧侶たちに供養するがよい。そしたら、大勢の僧侶たちの清浄な心の力が結集して、お前のお母さんはきつと救われるだろう」

「ありがとうございます」

(注) インドでは四月から七月にかけて雨期なので、お釈迦さまは、四月十五日から七月十五日までの九十日間、弟子たちの外出を禁じ、一処にとどまって静かな生活を送らせた。これを雨安居という。さて七月十五日の最終日は修行に参集した僧たちが、各自に反省懺悔する日なので、この日を僧自恣の日という。

爾時目連比丘及此大会大菩薩衆 皆大歡喜
而目連悲啼泣声釈然除滅 是時目連其母

即於是日得脱一劫餓鬼之苦

七月十五日、目連尊者が大供養会を設けたところ、お釈迦さまの教えの通り、お母さんは餓鬼の世界の苦しみから脱出することができたということです。

目連復白言……若未來世一切仏弟子 行孝順者

亦応奉此盂蘭盆……仏言

大善快問……年年七月十五日 常以孝順慈憶所生

父母……

「お釈迦さま。どうもありがとうございます」

「よかったネ」

「父母祖先を供養することがどんなに大切なことかよくわかりました」

私どもは日ごろ仕事に追われ父母祖先に対するつとめを忘れておりますが、誰もが日を同じうして、先祖のみ霊をまつり、冥福を祈ってその恩に感謝したいものです。



「それはいいところに気が付いた。仏教徒として一大運動を展開するがよい」

以上の物語がもとになってお盆の行事は生まれま
した。わが国では奈良朝のむかしから寺はもち論のこ
と、次第に一般の人々の家でも精霊棚を設けて先祖の
み霊をまつり、冥福を祈ってはその恩に感謝し、反省
のいとなみとするようになりました。



七月十三日（ところによっては月遅れの八月十三日
や旧暦の七月十三日）には墓地掃除をすませて精霊棚
を飾り、迎え火を焚いてこれを迎え、棚には新鮮な野
菜や果物にご馳走を供え三宝に供養したいものです。

「続二つの月」より

善
光
寺
便
り

成田大航君華燭の典を挙ぐ



善光寺徒弟成田大航君は、兩大本山の修行を了え、瑞世拜登を済ませた途端、福知山市土師の円覚寺住職に迎えられ、同寺法類円浄寺住職塩見老師の法を嗣ぎ、四月十七日、円覚寺本尊真前において、茅野順子さんとの結婚式を挙げられた。戒師は円覚寺法類の長老である長円寺方丈大槻老師、媒酌人は黒田方丈夫妻。披露宴はホテル万助でおこなわれ、その席上住職辞令が伝配された。まことにグットタイミング。二重のよろこびだった。主賓の佐藤俊明老師は、祝辞を述べ、最後を漢詩で結んだ。

祝 辞

大航さん、順子さん、おめでとう。

また、御両家、そして法類の御寺院、お檀家の皆様方のおよろこびは如何ばかりか、心からお祝い申し上げます。

私は、大航さんとは七、八年前から、順子さんとは三年ほど前から面識がございまして、お二人をそれとなく観察してまいりましたが、これはまことに似合いのカップルというか、いや、仏縁でなくては結ばれることのできないご夫婦と確信しております。それが証拠には、お二人には、結婚と同時にお寺が授かりました。大航さんにはお寺のご住職、順子さんは寺族とされるのです。これは、ほかの方々の結婚とちがって、二重の歓びであります。それだけに、「世界は二人の為に」とい

った風のお二人だけの幸せを考えればいいといったものではなく、「一人は世界の為に」仏さまのお心を心として世の為、人の為に尽くす生活を築き上げなくてはならないのであります。そしてそれは、お二人には必ずできると、私は確信しております。

と申しますのは、大航さんは横浜善光寺で、黒田方丈様のきびしい指導に耐え、黒田方丈様のケタはずれの素晴らしい寺院経営、布教活動を学ばれ、アメリカに留学して外人たちと共に坐禅にはげみ、また曹洞宗ポランティア会現地のコーディネーターとしてタイ国での難民キャンプに入っ、私の慈悲のお取次ぎに精進し、ワットパクナムにおいて修行し、最

後に両本山に安居して修行のみがき上げをされたのであります。一方、順子さんは、宗務庁にお勤めになり、寺院経営を広い視野から眺めると共に、日曜日には時折善光寺さんに奉仕して、檀務に伴う裏方の仕事を實地に学んでまいりました。こうしたお二人のこれまでのご精進はお二人をどれだけ大きく支え、どれだけ力強くはげますことでありましょう。どうか今後は御本師塩見老師はじめ、法類、教区の諸老師の御指導をいただき、正しい寺院経営の在り方を身につけ、御檀家の皆様の御期待にこたえてくださるようお願いいたします。私は、本日のこの盛典を祝して、お二人に次のような漢詩を賦してお贈りしました。

春入京師上福宮：京師とはご承知のように京の都のことですが、京都府福知山市土師は正に京都というにふさわしいのであります。禅宮とは禅寺のことですから、春、京師に來たつて禅寺に入るといのであります。

大航一路趨順風：大航とは大きな船のことであり、ここに新郎新婦のお名前を入れ、大航さんは順風にのつて、一路船旅に出発するといのであります。

洋々万里天弥爽：前の句に一路とありましたので、ここで万里と出して、お二人にとっては前途洋々、万里の船旅ですが、さいわいにして、天はいよいよ爽かにお二人を見護つてくださいます。そしてその幸せは

お二人だけのことではなく、

妙智山頭歳華豊：妙智山というのは
円覚寺の山号ですから、つまり円
覚寺のことです。歳華とは、
としつきのことであり、また春の景
色の意味もありますので、本日のこ
の素晴らしい風光のように円覚寺の今
後は豊かな歳月に恵まれるでありま
しょうというのであります。

春入京師上禅宮

大航一路趣順風

洋々万里天弥爽

妙智山頭歳華豊

ご両家の皆様方、お檀家の皆様方、
ほんとうにおめでとうございます。

春 夏 秋 冬

◆拝啓、桜の花が綻び山々の淡色に
一層はえ、快い候となりました。

さて十八日の朝全福寺の住職殿より
すてきな絵皿を頂戴し唯々吃驚する
ばかりでございました。急ぎ玄関に
飾らせて頂き来訪する方々に話して
おります。婦志子は、私の母で大月
から参りました人達の為に御多忙の
処たいへん厄介になりその御礼も出
来ないまゝ、このようなすばらしい御
品を頂けるとは、夢にも思いません
でした。一月に届けて頂きました本
の印象が脳裏にやきつき住職の凄
バイタリティーと行動には、活字の
中に吸い込まれていき感動すること
と頷くことばかりでございました。
只、方丈様のお人柄の良さとすばら
しい人達に巡り合えたことは、本当

に宜かったし、倅せであつたと…、
日頃の行動が目には浮かびます。私な
ど一步も近づけず、願うことばかり
でございます。努力する気持はいつ
もございますし、そのようになりた
いと考え乍ら感銘をうけた文章とま
だお会いしてませんが本のお写真よ
り拝見させて頂きました住職様と奥
様を思い出すのです。お会いする日
をととても楽しみにしております。こ
れも全福寺の住職と奥様のお陰と感
謝しているのです。

この肌襦袢は、仕事の合間に奥様
にと縫わさせて頂きました。(和裁
の仕立をし週二回出がいこで教えて
います)私の出来ることは、この程
度で何の御返しも出来ず恥ずかしい
のですが着やすく、お洗濯してもほ

つれないように一針一針縫いました
が、お気に召して頂ければ嬉しゅう
ございます。

乱文になりましたが礼状方失礼致
します。

主人、母が呉々もよろしくとのこ
とでございます。

本当にありがとうございます、
大切に飾らして頂きます。

かしこ

高山 婦志子

さつき

◆つめたい風は吹きましても、青空
の美しさに心を洗われるような日が
続きます。先だつての父の葬儀には
大変お世話になりありがとうございます
ました。私どもは悲しみの中にも、

先生のようなご住職様にめぐまれた
ことを、感謝し、幸福に思つており
ます。また昨日は、母と姉がおじや
まを致しました。おかげさまで、戒
名も立派になり、「ちゃんとするこ
と」が好きだつた父も、さぞ喜んで
いることでしょう。その上、すてき

なおみやげまで頂戴いたしました、
ただただ感謝でございます。母の話
では、善光寺はたいそうすばらしい
お寺でしたとのこと、私もぜひうか
がわせていただきたいと思ひます。
お風邪をお召しと聞きました、やは
り頭がお寒いのではないでしょうか
(?)

どうぞ御大切になさつて下さいま
せ。私も一昨日から仕事に戻りまし
たが、仕事とはありがたいものです

ね。同僚のやさしい言葉が身にしみ
ます。

それでは、きょうはこの辺で失礼
させていただきます。ほんとうにあ
りがとうございました。

鶴我 裕子

◆いつも御指導頂き有難う存じます。
二月十三日午後私は伊勢佐木町を地
下鉄駅の方に歩いていました。少し
はなれたところを通り過ぎられた黒
田大圓師様に気づきました。洋服の
お姿でしたが、ご挨拶申し上げるの
も気がひけました。平常の精進のお
心がにじみ出ている様な並の人でな
いお姿でした。あとを見送り思わず
手を合せました。

通りすぎし師を見送りに洋服の
うしろで尊くしばしをうがむ

山東 とも

◆拜啓余寒御見舞申上げます。この

間タイにゆきました。上座部寺院ではトをやるし、竹のおみくじはあるし、船の進水式のおはらいもやっています。日本の仏壇に匹敵する庭におく小祠M a M o m (神の像)も沢山あります。雀や魚の放生池もあります。

こういう大衆的实践が殆んど日本に紹介されていないのは残念です。どうか貴寺の海外留学生に庶民の生活に浸透した実態調査をやって頂きたいのです。バスや船くらいはタダでしょうがその限界も知りたいもの

です。タイは仏教国と云ってまかなりヒンドウ教が浸透しています。

最近前田先生を中心にスリランカ仏教の研究の本が出るようです。

「現代スリランカ仏教」山喜房刊

御法愛を頂きました曹洞宗実践叢書十巻が三月には完結します。

坂内 龍雄

◆前略 余寒のきびしい毎日ですが

又一雨欲しい此の頃で御座います。

節分会は御盛大だったこと、お慶び申し上げます。

御多忙にもかかわらず早速に、お礼や福マス、又領収書を送って頂き、四日に到着致しました。

誠に有難う御座いました。

美也子のお礼は良縁祈願となつて居

りまして、そのお心遣のほど大変嬉しゅう御座いました。

私共も良い方にめぐり会えます様に念じて居ります。

皆様にはくれぐれも御大切に遊ばされます様にお礼のみにて失礼致します。

岩崎 博

■前略 先日は成寿第四巻お送り下

さいまして、まことにありがとうございます。早速相誦しましたがワツ

ト・パクナムご訪問の写真並びに田中、梅田両留学僧のレポートなど大変なつかしく読ませていただきました。前号といい今号といい、生きている仏教の世界が語られていて躍動せるユニークな時報に心温まる思い

編集後記

▲海外留学僧派遣育英会の役員に、中村元先生が名誉顧問、鎌田茂雄先生、高崎直道先生がそれぞれ顧問をお引き受けくださった事で、海外留学僧派遣育英会が更に充実したものになりました。

海外留学僧派遣も回を重ね、今年はずでにインドとアメリカに向学心に燃える留学僧が派遣されました。

それぞれ異なる国で、様々の体験を通したレポートが送られてくることを楽しみにしています。

▲「成寿」誌上や、折々の行事での法話など、当山には大変深いご縁をいただいている千葉県龍光寺のご住職、佐藤俊明老師が、講談社から

「修証義に学ぶ―禅に生きる五章―」を出版された事を祝って、佐藤老師を囲む祝賀会が、五月八日午後五時半より、東京のホテルニューオータニで開かれました。

当山の黒田方丈が進行役を務め、「成寿」のカットで毎回ご登場いただく伊藤喜三郎先生をはじめとする発起人、世話人の方々のご尽力によって、百五十人を越える出席者が和やかに集い合い、盛会のうちにおわりました。

各界から高い評価と称讃が贈られました事は、私達にとりましても大変うれしいことであります。

中外日報でもこの記事を大きく取り上げ、「修証義」の解説書が天下の講談社から出版されたということ

は、「修証義」解説書出版史上、特筆大書すべき事件である」と讀えています。どうぞ皆さまもご一読ください。

▲「成寿」も第五号を発行することができました。皆さまからお寄せいただいたハガキを中心に「春夏秋冬」という読者コーナーを設けて、今後これを充実させていきたいと思えます。また、とりあげてほしいテーマや企画がございましたら、是非ご一報ください。

成寿 第五号

昭和六十一年六月吉日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野町一六〇四

電話 〇四五(八四五)一三七一

印刷所 神奈川新聞社出版局

をしました。遅れ馳せながら、お礼のことばといたします。

合掌

佐々木 教悟

■謹啓 この程は成寿六十一年春季号御恵送下さいましたのしく拝見させて頂きました。

尊董山主様の御熱情あふる、ご強化力には私も鶴見の本山時代から深く傾倒いたしましたし、その頃雲衲のタイ留学に大変お世話になったことを心に銘じております。昨年から宗議に選出されて、老木誠に恥しい次第ですが、激動流転のはげしい社会情勢の中でいつも宗門行政に霧海羅針の光明を求めてやみません。色々と又おしえて下さい。但馬は雪

漫々春はまだまだ遠いです。どうか呉々も御法体ご自愛祈念申し上げます。

敬具

多田 俊洞

編集部より

前号より巻末にハガキを綴じ込みましたが、たくさんのお便りを頂戴いたしましてありがとうございます。早速掲載させて頂きました。

今後、俳句、和歌、エッセイ、その他『成寿』へのご希望

やご批評など、お気づきになられた事を、どしどしお寄せください。

お待ちしております!!

ご寄附御礼

左の方々より寄附を頂戴いたしました。誌上より厚く御礼を申し上げます。

◇海外留学僧派遣育英会

港南区 瀬之間政勝様 五十万円

岩井 月雄様 一万円

鶴我 裕子様 三万円

◇『成寿』賛助

東京都 石川 良暁様 一万円

大乗寺 板橋 興宗様 三万円

定光寺 大道 晃仙様 三万円

ありがとうございました。



合掌かんのん

かんのんさまの前で

かんのんさまを見えています

かんのんさまに見られています

合掌して見あげると

合掌して見てくださる

わたしよりも先に

わたしを拜んでくれます

わたしの中に射しこむ光

慧日破諸闇

普あまねき光の中で

じっと待っています

じっと考えています

あなたのみ声が

わたしの胸に流れ来るまで

壽 光 善



真 橫